

ダイドス論

新井宏

かつて研究開発を担当していた頃、盛んに提唱していたのが「ダイドス論」である。気取って「DIDOS論」などと書いたこともあるが、もちろん米語の「悪ふざけ(Didos論)」の意味ではない。語呂がディオス、ダイオスに通じ、何となく印欧語感があるが私の造語である。要は研究開発のノウハウを、①ダボハゼ、②イモヅル、③ドロナワ、④スッポンと唱え、その頭文字をつなげただけのものである。

いづれも日本語としてはあまり上品な語彙ではないが、続けると結構しゃれていて、社外でも受けた。研究開発という仕事には極めて個人的な部分があつて、その心得とかノウハウを一般化して伝えようとする、白けてしまふが、こんな簡単な形なら多少伝わるものがある。しかもこれを人生論として捉えてもある程度通じるところが面白い。私の人生のバターンそのもののような気さえる。

ダボハゼのごとく飛びつき

面白いことを見つけたら

イモヅル式に同類項を手繰り

焦点を定めたら

ドロナワ式に準備を整え

喰らいついたら

スッポンの如く離さない

これだけで十分に通じる。だから「ダイドス論」などと称して、解説を加えるのはまったく野暮なことだ。しかしそれを承知しながら、やはり何かを書いて見たい。ますます粋な世界から遠ざかる。

ダボハゼ

ダボハゼ、すなわち何にでも手を出す野次馬根性、それともうすこし上品に言い替えれば旺盛な好奇心、それ

が若さの証拠である。この野次馬根性こそが、研究開発ばかりでなく、人生を謳歌する鍵だと思っているが、意外に賛同してもらえない。野次馬と言ってしまうと、どうもその裏側にある無責任さや尻馬に乗る性質ばかりが目について、評判が良くないのかも知れない。

しかし純真な子供は好奇心のかたまりである。それがいつの間にか大人になると衰えて、ダボハゼのごとく、やたら飛びついて、物笑いになるのを恐れ始める。そればかりでなく、他の人のダボハゼ行為に冷や水をかけ、せっかく燃え上がり始めたフィーバーを鎮める側にまわってしまう。これが研究開発では最大の敵である。

好奇心を維持し続け、何事にもダボハゼのように喰いつく風土を作るにはどうしたらよいのだろうか。それは研究開発に携わる者の共通の課題で、そんなに容易なことではないのは承知している。妙案などあるはずもないが、経験によるとそのノウハウは、どうも無責任になることにあるらしい。

ところが無責任になると云うことがなかなか難しい。小さい時から他人との信頼関係を大切にするように育てられ、いつのまにか無責任になることには、生理的な嫌悪感を感じるようになっていくからである。しかしものは考えようである。ひとつの考え方を示してみよう。

勝負事には賭率と云うものがある。賭率が同じなら誰でも本命を買うに決まっている。だから、何か新しいこ

とをやるうとする時、賭率を同じにすると現状維持派が多数を占めるのは自然の成り行きだ。まじめに考えれば、今までにできていなかったことが、そう簡単にできるわけがないからである。

ところが賭率を十対一に設定すると、見える世界が変わって来る。百パーセントの可能性を前提にして問いかければ、責任を持ってイエスとは云いかねるが、十パーセントくらいの可能性で良ければ肯定的な答えが返ってくる。無責任になるとはこのようなことなのである。その見返りは十倍以上の果実である。

人生にはこのような形で無責任になることが許される分野がある。その代表が賭事の世界だ。いや賭事ばかりではない。趣味や研究もその世界に入る。いずれも人生で最高に楽しい遊びであることが共通点である。小説家や画家、作曲家それに研究者は、わずかな成功の可能性に人生をかけているからこそ魅力的なのだ。むかしは研究をすることなど貴族にだけ許された特権であった。

ところで、好奇心を育てるのにどうしたら良いかがしばしば話題になる。しかしこれは順序が逆で、好奇心を失わないのにどうしたら良いかと設問しなかなければならないだろう。もともと子供は好奇心の塊なのだから。だから小学校の先生の役割はとて大きい。

小学校四年生の時、疎開先の小学校にピアノが運び込まれてきたことがあった。夏休みで誰もいないその薄暗

い教室にどうして入って行ったのか覚えていない。しかし黒塗りのピアノなのにその一部が桃色に映えているのがとても不思議であった。コスモスの花がぼんやりと反射していた。

黒塗りのピアノが桃色に変わって見える。その小さな発見に興奮して、しばらくの間あれこれと物を持ち込んでは実験を続けた。かぼちゃの葉はちゃんと緑色に映った。そのことを夏休みの宿題として書き上げて提出したのが私の人生初めての論文である。これを担任の新保先生がとてもほめてくれた。

このような出来事が、現在の自分とどう関係しているかわからない。しかし、この大人からみれば、馬鹿げた作文をほめてくれた新保先生がすばらしかった。

だから私もぜひ一度でいいから学校の先生をして見たかった。できれば小学校、それが無理なら、中学校か高校でも良い。それも駄目なら大学でも良い。そして今大学の先生の真似事をしながら、わがダボハゼ学を熱く語っている。

イモヅル

ダボハゼで飛びついてみた結果、何か面白いものに出会ったらどうするか。誰でも自分の発見に夢中になるはずである。それが全ての始まりであるが、ここで重要なノウハウは、そこでいきなり突き進むのではなく、その

まわりをいったんきよきよ見回して見ることである。縦横、斜め、前後、左右、上下と、とにかく類似項を探すと良い。

もし三戸岡道夫氏の『二宮金次郎』に感銘を受けたのなら、片っ端から氏の書き物を読み漁る。きつと最初に出会ったものと同じ位に、あるいはそれ以上に素晴らしいものが見つかるはずだから。それから他の人の書いた二宮金次郎を漁ってみるのも良いだろう。また手法に注目して、歴史上の人物に経済面などから新しい光を当てたものを探すのも一方法である。もし有名な人物でまだ誰も新たな光を当てていなかったら、それこそ何か出番があるかも知れない。

信じてと良い。面白いものには必ず面白いものが連なっていると。それが法則である。良い人脈には良い人が連なっているのと同じだ。だからせつかく良いネタを見つけたら、これを何倍にも何十倍にもしない手はない。しかもこのイモズル式は特殊な才能を必要としなくて誰でもできる。これによって、何かの目的を達成できる確率が十倍にも百倍にもできるのに、このプロセスを省略している人が意外に多いのは残念である。

ところで、イモズル式に最も必要なのは、視点の異なる人とワイワイやって手繰るべき方向を早く見つけ出すことである。そして次は迅速な情報収集とアイデアの配列表の作成。

今はインターネットの時代で、キーワードが判れば、ある程度までは簡単に情報を入手できる。膨大な私設図書館をもってのようなものだ。そしてそれらの情報に順序をつけて並べて、欠けている点を探します。

人間には誰でも、順序や数にこだわる性格がある。完結性にこだわる性格がある。一、二、三、四、五と数えて、六がなく七に続くと、どうしても六をうめて見なくなる。初夏の花が美しい山に秋に登り、紅葉映える山に春に登って、ひたすら百名山のピークハントをしている中高年がたくさんいる。比叡山や大峰山の千日回行に見習い、地元の山を千回登った人たちも珍しくない。有名な谷川岳では三千回登頂目指し、すでに二千回を越えた人がいると聞く。イモヅル式の面白さはこの数へのこだわりと複合すると倍加される。

例えば普通、誕生日は年に一回である。しかし韓国では陰暦の誕生日もある。さあここからは縦横斜めの応用問題だ。一万日誕生日、二万日誕生日を祝ったらどうだろうか。実は私は二万日誕生日をドイツのジーゲンで妻と共に祝ったことがある。そして三万日の誕生日を無事に祝えたら人生最高だ。八十二歳とちよつとになるはずだ。

小学校の時の久米準先生もそのように数にこだわっている方である。小学校の教科書に出ている日本の山を片っ端から登った。それが済むと外国の山まで足を伸ばす。

す。定年になったときには、さあこれから一億歩を歩くと宣言して、十三年七ヶ月かけ、ことしの十一月十五日にこれを達成した。一日平均二万歩以上である。尋常のこだわりではない。

私も万歩計と毎日格闘している。つけ始めて今年で九年、こんどの正月には五千万歩になる。地球ひとまわりには少し足りないが、このこだわりがあつて健康を維持している。久米先生の影響のお陰かもしれない。

久米先生に出会つたのは、疎開から東京に帰つた小学校六年生の時。先生はまだ二十歳だったのではななろるか、よれよれの詰襟学生服を着ていた。授業ではしよつちゅう吉川英治の読み物を何時間も朗読してくれた。まだ世の中が固まらず規制のゆるい良き時代であつた。その中で歴史好きの少年が何人も誕生した。

だから私もぜひ一度でいいから学校の先生をして見たかつた。できれば小学校、それが無理なら、中学校か高校でも良い。それも駄目なら大学でも良い。そして今大学の先生の真似事をしながら、わがイモヅル学を熱く語っている。

ドロナワ

最近ではドロナワと云う言葉は死語化しつつあるようで、若い人には通じない。泥棒を見てから縄をなうことから、事が起こつてから慌てて準備すること……手遅れ

だ、と云うのが本来の意味であろう。しかしここで用いているドロナワはそんな意味ではなく、事が起こってから慌てて準備することを推奨することなのである。ドロナワ式で良いから急いで体制を作ろうと云っているのである。

もともとせっかく面白い事が見つかって、それを煮たり焼いたりする道具が準備されていない方が普通である。そんな時にはなんでも良いから、在り合わせの物をかき集める。知識が足りなければ、付け刃で間に合わせる。とにかく気が抜けてしまわない内に体制をつくり上げるスピード感が重要だ。その時のノウハウは目標だけを見つめて、徹底的に手抜きをするアプローチだ。

一般には、そんな日のために精緻な網を張って待っているのが高級で実力が高いと思われている。そう思っている人たちは、兎が飛び込んでくるのだけを待っていて、獲物が兎以外だと見向きもしない傾向がある。これでは物の成る確率は高くない。鹿でも鴨でも猪でも、何でも良いから、獲物を見たらあわてて準備する。これが最も安上がりで、もつとも物が成就する確率が高い。

世の中には専門というのがあって、専門外の人が急に勉強してもとても追いつけるものではないと錯覚している人が多い。しかし局所戦なら三日間も勉強すれば、専門家と伍して行ける。すこし体系立った分野でも三ヶ月も勉強すればそれで十分である。

もちろんそんな程度では、専門家なら誰も陥ることのない間違いをたくさんおかすことにはなる。しかし、一方では専門家が思いも寄らない発想に至ることもしばしばある。研究や開発の視点から見れば、その方にむしろ分がある。

中学校時代の坂永先生がそうであった。英語の担当であったが、とにかく若さと情熱あふれる先生で、いつも走り回っていた。未熟さゆえに走りすぎては、生徒に迷惑をかけたと謝り、また走り出していた。失敗ばかりしていたが、リカバリーが早く、生徒には一番人気があり、結局一番実績をあげていた。校長先生で定年退職してからも、語学学校を経営したり、最近では中高年者の結婚紹介業まで手がけている。だからドロナワのできる人こそが実力者なのである。

その時の経験から先生は新米ほど良いと思っている。経験豊かになり、教え方がうまくなると、生徒に遠回りをさせまいとして、無意識の内に好奇心を制約し始める。それに対して、新米らしく失敗ばかりしている先生であっても、子供たちはその後姿を良く見て育つ。それが真の教育ではないだろうか。だから子供に経験不足の新米先生が付いたと心配する必要はない。むしろそれが最高の先生なのだから。

だから私もぜひ一度でいいから学校の先生をして見たかった。できれば小学校、それが無理なら、中学校が高

校でも良い。それも駄目なら大学でも良い。そして今大学の先生の真似事をしながら、わがドロナワ学を熱く語っている。

スツポン

この言葉は、もしかしたら野次馬根性とか好奇心とはなじまない面があるかも知れない。しかし野次馬になれる人は、何かに拘れる人でもある。ダボハゼをし、イモズルをたぐり、ドロナワ式に体制を調べても、思ったような成果が出てこないのが人生である。薄ぼんやりと先が見えているが、なかなか核心に迫られない。そのもどかしさの中で、ともしればあきらめなくなるのが人情である。しかしそこで、スツポンの如く喰いついたら放さない。それが物の成就する重要な過程である。

私も東アジアの古代計量史にのめりこんで三十年以上になる。その間とにかくスツポンのように喰いついたら離れなかった。そのお陰で、いま韓国での研究生活をおくることができ、期待以上の成果を挙げ続けている。

久米先生も定年後一億歩の目標を達成した後も、さらに三千万歩の目標に向かって歩み続けている。定年を迎えつつある多くの教え子たちに対してさえ、いまだにエールを送り続けている。

だから私もぜひ一度でいいから学校の先生をして見たかった。できれば小学校、それが無理なら、中学校か高

校でも良い。それも駄目なら大学でも良い。そして今大学の先生の真似事をしながら、わがスツポン学を熱く語っている。

